

古典研究会 研究発表

是為論^{これ ろん な}～是を論と為す～⑮

『打手要言』第3・4段(その1)

前月号までに『打手要言』第1・2・5段落をご紹介しました。今回は、別名『太極拳論要解』とも呼ばれる『打手要言』第3・4段落の本文と意識文を掲載し、この2つの段落の特徴をご紹介します。

～本文～(「郝和本」を底本とする。)

【第3段落】

又曰 先在心。後在身。腹鬆。氣斂入骨。神舒體靜。刻
刻存心。切記一動無有不動。一靜無有不靜。視靜猶動。
視動猶靜。動牽往來。氣貼背。斂入脊骨。要靜。內固精
神。外示安逸。邁步如猫行。運勁如抽絲。全身意在蓄神。
不在氣。在氣則滯。有氣者無力。無氣者純剛。氣如車輪。
腰如車軸。

【第4段落】

又曰 彼不動。己不動。彼微動。己先動。似鬆非鬆。
將展未展。筋斷意不斷。

～意識文～

又曰く 心が先に在り、身はその後に続く。腹を緩
めて、内気は骨に収め入れ、精神はゆったりと、身体
は静にする、これらのことを常に留意すべきである。
覚えておくべき大切なことは、一たび動けば動かない
ところは一つも無い、一たび静まれば静まらないとこ
ろは一つも無いことである。

静かななかに動の要素があり、動いていても静の要
素がある。動作の往来はあるが、その間、気は背に貼り、
背骨に斂め、心身を静に保ち、体内では精神が集中し、
外見はリラックスしている。歩みは猫が行くが如く軽靈
であり、運勁は糸を紡ぐが如く連綿と絶えることがない。

全身をつかさどる意は充実した神に宿り、氣に在る
わけではない。氣に在れば即ち滯る。氣の有る者は力無
く、氣の無い者は純剛である。氣は車輪の如く全身を巡
り、腰は車軸の如く上肢と下肢をつなぎ動きを主宰する。

又曰く 相手が動かなければ自分は動かず、相手が
僅かに動くとき自分はすでに仕掛けています。緩んでい

るようで緩みに非ず、まさに伸びようとして未だ伸び
ていない。勁は断たれても、意は断つこと無くつながる。

＜重要な内容が繰り返されている＞

『打手要言』の第1・2段落は「解曰」から本文が
始まっていました。「解」という文字には、解説する、
理解するという意味があります。第1・2段落には
『太極拳譜』内の文献に出てくるフレーズがたびたび
出現していることから、拳譜の内容を中心に読み解
きながら、武術の大切な要素を論じていることがう
かがえます。

第3段落以降は「又曰」から本文が始まっています。
「又」には、先の事柄を補足して繰り返す意味があり
ます。実際に第3・4段落の文章をみていくと、そ
れ以前の段落ですでに説かれた内容が、表現を変え
ながら繰り返し出てきます。

全部で5段落から成る『打手要言』はひとつひとつ
の段階を経つつ、作者が重要と思う内容を反芻^{はんすう}し、
強調しながらまとめた文献と考えられます。

例えば『打手要言』第2段落にあった「**先在心。後在
身**」という表現は、第3段落にも出てきます。動く
ときに意(心)の導きが重要だと印象づけるためでしょう。

また、第2段落にあった「**彼不動、己不動。彼微動、
己先動。**」という表現についても、第4段落で同じフ
レーズで出てきます。相手の動きに従うべきで、相
手が動いたとき自分はもう仕掛けていているという相手
との対峙の要領が繰り返されています。

＜内面を表す文字が何度も繰り返されている＞

『打手要言』の全段落において、言い回しだけでは
なく、何度も出現する文字があります。例えば、心、
意、氣、静という文字は、『打手要言』全体で十数回
も出てきます。また神^{しん}という文字も、それらに次い
で多くあります。心、意、氣、静、神の文字は、す
べて自己の内面に関わる要素を示す文字です。この
うち氣という文字は、第3段落の短い文のなかに7
回も出てきます。体中に巡らせる氣の運用方法を誤
らないことが大切なのです。

※次回は『打手要言』第3・4段の内容を
解説します。

協会ホームページには過去の回もすべて掲載し
ています。QRコードを読み込んでご覧ください。

